

□海外文献紹介□

**炎症性腸疾患患者にみられる性格
的側面と情緒状態**

Personality profile and affective state of patients with inflammatory bowel disease: *Robertson DAF, et al* (*Gut* 30: 623-626, 1989)

炎症性腸疾患(以下 IBD)患者には、一種独特の性格が存在する、と内科医や外科医の多くは考えている。著者らは、この“IBD 気質”とも言うべき性格が、病態に先行して存在しているものなのか、それとも病態の結果として生じたものなのか、更には、病態の再燃とどのような関係にあるのかを知るために、面談とアンケートによる調査を行い、精神科学的判定基準をスコア化

し、分析を行った。調査対象は、確定診断された 80 名の慢性 IBD 患者と、確定診断前の 22 名の IBD 患者(いずれも非手術例)で、40 名の糖尿病患者を慢性疾患コントロール群とした。調査の結果、IBD 患者は急性、慢性を問わず対照群に比べ、有意に高度の神経症気質と内向性を示し($p < 0.05$)、更にこの傾向は IBD 患者の中でも診断確定前の患者に強く見られた。また、抑うつ状態は、慢性 IBD 患者の活動期に見られたが、IBD 群全体では一般的なものではなかった。内向性は、罹患期間が長期にわたるほど強まる傾向が見られた($r = 0.51$)。一方、IBD 患者の多くは、精神状態と病勢の変化の間に関連があることを認

識しており、最も増悪を促進する因子として、日常生活におけるストレス性の強い出来事を挙げている。以上より、IBD 気質は病態に先行して存在し、それに伴う消化管および免疫機能の障害が、IBD への引き金になっていると結論づけている。

<訳者コメント>IBD 患者の多くが、自分の悩みや不安を打ち明けたり、相談したがっているにもかかわらず、その機会をなかなか得られないのが現状である。そのような事実から、IBD 患者の治療における精神的なケアの重要性と、この疾患の持つ特殊性が再認識させられた点で興味深い。

(愛知県がんセンター消化器内科

山本恵祥 抄)